

of the Student の全訳が、京都大学石井助教授らの盡力をもとに、この会議のメンバー全員の協力による全訳として完成し、文光堂から公刊されたのもこの年の5月である。第5章コーン、G.P. の「急性精神病・抑うつ状態・発揚状態」を永田忠夫との共訳で私も分担した。2年にまたがる共同作業の成果をふまえ、これら研究会議の今後の課題は、いわゆるstudent apathyの問題と、グループ・アプローチとに集約され、それらをめぐっての私ども自身の実践が、昨年にひきつづいて51年度もまた企画されている。

(6) 精神障害者への接近は、今年もまた、現象学的志向によるロールシャツハ研究を、「現象学研究会」の中で数名の仲間と共に、症例研究を中心として積み重ねてきた。従来の蓄積された資料とあわせ1本にまとめることを期しているが、今日まだまとめの段階に到っていない。しかしながらこれらの検討をとおして、「心理学における人間接近への道はいかにあるべきか」、冒頭にかかげた主題に沿った、私自身の現段階における中核の課題を、さらに問いつづけていきたいと考える。

研 究 経 過 報 告 久 世 敏 雄

「児童の心身発達の追跡研究」および「中学生・高校生の社会的態度に関する研究」は、継続中である。過去1年間の成果は、つぎのとおりである。

1. 「児童の発達特徴」「心理的離乳」
広岡亮蔵編『授業研究大事典』 明治図書
昭和50年4月
2. 「青年期へのアプローチの方法」
井上健治ら編『有斐閣大学双書 青年心理学』
有斐閣 昭和50年7月

3. 「青年期の自己開放性に関する一検討
— 対象の類型の観点から —」
教育心理学科紀要 22巻 昭和50年9月
4. 「中学生・高校生の社会的態度に関する研究(II)」
(速水氏と共同)
教育心理学科紀要 22巻 昭和50年9月
5. 「価値多様化時代と思春期」
教育と医学 24巻3号 昭和51年3月
6. 「青年心理研究の方法論」学位論文
昭和51年3月

一 年 間 の 研 究 経 過 村 上 隆

ここでは、私が本学に就職した昨年4月から、本紀要締切り(6月末)までの経過について述べる。本学に応募した際に提出した“研究経過と研究計画”には、主たる関心領域として3つあげたが、それぞれに則して、簡単に記することとする。

(1) 心理学における測定の論理

一次元の心理的連続体における、差の判断の大小関係から、尺度値を求める、いわゆるdifference scalingに関する考察を続けている。Kruskal流のnonmetricな手続きによる解法のプログラムを作成し、(2)において利用したが、もしデータが、ある公理を満足していれば、この解は連立一次不等式の解集合となることが明きらかである。故に、この解集合全体を求めることにより、解の一定の範囲での一意性について明きらかにできると期待される。これは本年度の課題である。

(2) 心理物理的尺度構成におけるそれらの論理の検討

上記difference scaling を適用して、対比効果を含む明度関数の形を決定する問題を取り扱った。ある種の原理的考察から、可能な関数型を幾つか導出し、あてはめを行なった。これによれば、

$$f(s, b) = p s^n + C \quad (s \geq b)$$

$$f(s, b) = p s^n + q |s - b|^n + C \quad (s < b)$$

なる関数が最もよくあてはまる。ただし、 s, b はそれぞれテスト刺激と、背景刺激の比反射率である。現在、より詳細な検討を進めており、近く論文として発表する予定である。なお、これらの内容の概略は、昨年及び本年の日本心理学会大会抄録に掲載されている。

(3) 多次元解析的手法

主力を注ぐはずであったこの領域が、最も不十分であった。わずかに、水野欽司、千野直仁両氏と共同で、潜在プロフィル分析の計算手法について検討したにとどまった。応用的な面では、研究生榎本阿津子と共同で、離

接概念学習の学習曲線の因子分析を、概念学習の方略との関連で、試みた。多少 positive な結果も得られているので、データの補足を行ない、明年の紀要に発表す

る計画である。なお、“計量分析談話会”等を通じて、当地において、この領域に関心を持つ人々と親しくなれたことは幸いであった。

一 年 の 歩 み 薩 山 英 順

この一年は昨年度と同様に、臨床心理相談室における心理治療の実践を中心に、またそうした実践活動を通しての研究活動を継続してきた。

こうした活動の内容としては、自閉児の心理治療、治療教育を中心に、相談室においては自閉児の個別遊戯療法および集団遊戯療法を実践し、自閉児の治療教育においては学校教育の現場に出かけ、自閉児を持つ担任と具体的治療教育の方法について検討を重ねてきた。

これらの活動の「まとめ」として、本年度の紀要に丸井文男らとの協同研究として「自閉児の集団適応に関する研究—その(2)—、—その(3)—」をまとめた。前者においては、自閉児の普通学級における低学年段階の適応状況の変容とそれを規定する要因について検討し、後者においては、特に所属する学級の特質は問題にせず、症児側の知的ポテンシャルと高学年段階における学校適応上の問題について検討した。

また、自閉児の基本的な発達過程の把握の問題について、就学前までの過程の検討を行い、自閉児の言語発達過程による5類型のうち、最も発達速度の遅く、予後に関して悲観的と考えられている言語の消失期を持つ群

(L1型)の対人関係発達の様相から、L1型の中でも就学時までに良好な発達を示すタイプとやはり不良な発達しか示さないタイプのある事を見出し、日本教育心理学会第17回大会に発表した。

さらに、本年度においては大学院生、学部研究生の諸君と「遊戯治療における治療的意味の検討」を具体的症例を通して行ってきており、自閉児および情緒障害児の遊戯治療を中心に、そうした問題をまとめつつある。また、こうした方法によるスーパーバイズ・システムとしての有効性を感じており、今後、その意味においても検討していく予定である。

研 究 の 課 題 と 経 過 梶 田 正 巳

昨年4月1日付をもって、教育心理学教室へ着任した。この一か年は、新しい教室で研究を始めるための準備とこれまでの研究の成果に区切りをつけ、新たな出発点とする仕事に忙殺された。

1. 弁別学習の研究は、一昨年学位論文をもって、一つの折目をつけることができた。この論文には、未公刊の実験も含まれており、愛知教育大学中野靖彦氏と共に、日本教育心理学会第17回大会(昭和50年9月、宮城教育大学)において2編を口頭発表した。また、これに関連するその後の実験的研究については、本紀要の資料として執筆した。

2. 上記の研究との関わりで、新たな研究の方向付けを現在模索しようと試みている。これは、分類学習、弁別学習における「分類されたもの」、「弁別されたもの」の相互関連性について、Piagetのいわゆるgrowth of logic をヒントにして分析する仕事である。そのために、50年度の研究費で「反応時間自動記録装置」を設置して

いただいた。このおかげで、実験者は、被験者の反応記録をとることから解放され、学習過程を観察する余裕が生まれるようになった。なお、この装置を利用して分類学習の実験を始めているが、従来の学習過程の解析資料に、有意な成果をつけ加えることができればと期待している。この実験との関係で、3歳児より6歳児にかけて、線画による「具体物」を刺激として、命名反応の分布を調査した。この調査資料を手掛りとして、学習、記憶の研究ではきわめて必要度の高い「norm」の明らかな標準的刺激の作成を試みてみたい。この方向における研究には、若干の基本的問題を検討する必要がある、日時を要する。

3. 昨年11月春日井市立東部中学校において、第10回全国バズ学習研究集会在開催された。この集会上、塩田教授とともに助言者として参加したのであるが、改めて教育実践に直接示唆しうる教育心理学的研究の少ないことを痛感した。微力ながら、教育実践に役立つ教育心理